

バイモーダル・バイリンガル研究 最近の動向

(Reserved for video)

バイモーダル・バイリンガルってどんな人？



バイモーダル・バイリンガルはモダリティ（使用する感覚器）が異なる2つの言語を使います。

多くの場合:手話言語＋音声言語

それと:手話言語＋書記言語

(Reserved for video)

補聴機器と手話は併用していいの？



<https://magazine.uconn.edu/2018/02/28/case-bilingual-deaf-children/>

- 手話は音声言語の発達を妨げるか？
- 聴者の家族はろう・難聴児に適切な手話環境を与えられるか？

(Reserved for video)

早期介入におけるバイモーダル・バイリンガルをめぐる論争

手話は人工内耳装用児の役に立たない、むしろ言語発達の邪魔になるだろう。 [1]



バイモーダル・バイリンガルであることは無言語状態を防ぎ、言語習得の機会を増やす。 [2]



(Reserved for video)

口話だけの方法による残念な結果



- ろう・難聴児は今では早期発見により早期人工内耳手術、よりよい早期介入実践とすばらしい技術の恩恵を受けることができる。
- しかし、ろう・難聴児は言語発達の様々な面で平均以下の結果となっている。 [3][4]

(Reserved for video)

[3] Caldwell & Nittrouer (2013) [4] Carrigan & Coppola (2020)

[People illustrations by Storyset](https://storyset.com/people)

補聴器または人工内耳使用児の英語力の差 [3, 4]



ろう・難聴児の早期の補聴器や人工内耳の使用は年齢相応の語彙力の発達を保障しない。彼らはインプットが十分ではないことから、学習のレベルがあがれば、さらに危険な状態におかれる。

- 補聴器・人工内耳使用の子どもは(~3-6才)は同年齢の聴児と比べかなり点数が低い。
- 8年生の補聴器・人工内耳使用の子どもは曖昧な文の理解において、得点差が大きい(より高度な言語スキル)

(Reserved for video)

ろう・難聴児の言語インプットが足りなくなる理由

- 雑音の多い背景や聞くことの疲れ [5]
- 言語発達の臨界期 [6]
- 無言語状態による早期の遅れは、学年があがれば言語使用の難易度があがり、より大きな問題になる。
- 人工内耳装用前のろう・難聴児に対する親の反応の量と質 [7]

(Reserved for video)

聞こえる家族からのろう・難聴児に対する年齢相応のASL語彙 [8]



6ヵ月になるまでにASLに触れると
:理解と表出ができるASL語彙はデ
フファミリー出身のろう・難聴児
と同じ(104人).

聴家庭出身のろう・難聴児78人,
月齢 8 - 68ヵ月

[8] Caselli, Pyers & Lieberman (2021)

(Reserved for video)

早期 & 自然な手話 は音声英語の発達の邪魔にならない[9]

一般的な言語測定基準
ASL 理解度テスト

音韻認識
音声明瞭度

表現語彙
産出できる文法力



デフファミリー出身（手話を使う家族）で補聴器使用のろう児は標準英語テストで聴児の正常範囲の点数で、口話だけのろう・難聴児よりもよい点数だった。

(Reserved for video)

[9] Davidson, Lillo-Martin & Chen Pichler (2014)

[Marketing illustrations by Storyset](https://storyset.com/marketing)

家族の ASL: 聞こえる家庭のろう児のバイモーダル・バイリンガル発達 [10]

新しい5年プロジェクト: 聞こえる親の第2言語としてのASL習得とろう・難聴児のバイモーダル・バイリンガル発達 (英語 & ASL)

(Reserved for video)

目標:聞こえる家族が質量ともにすぐれたバイモーダル・バイリンガルのインプットができるように支援する

たくさんの量

- いつでも-家の中と外の両方で
- さまざまな情報源から

高い質

- 子どもに十分な視覚情報を与える
- 文法的に一貫性のある自然言語

(Reserved for video)

音声言語 ~~か~~ と 手話

"...[た]とえ親が自分の子どもに音声言語を身につけて欲しいと思ったとしても、音声言語への不十分なアクセスによる言語習得におけるギャップを埋めるものとして、手話が与えられるべきである。" [4]

"専門家たちが「どちらがいいか」という古臭い議論にこだわり続けるならば、言語剥奪が本当におこり得るという危険にさらされているのだ。 [11]